



回遊劇場 SPIRAL | 記錄集 2020



回遊劇場
S P I R A L
OITA ART FESTIVAL 2019

回遊劇場
S P I R A L

| 記錄集 |

CONTENTS

目次	
ごあいさつ	
大分市アートを活かしたまちづくり推進会議 会長 姫野昌治	1
大分アートフェスティバル 企画委員会 委員長 於保政昭	2
大分アートフェスティバル 2019「回遊劇場 SPIRAL」概要	3
ディレクターズコメント	
「SPIRAL-都市の現場のために」ディレクター 菅 章	4
インスタレーション	9
[大分合同新聞社旧輪転機室・旧紙庫] 倉重光則 曾谷朝絵 原口典之	10
[レンブラントホテル大分] 岩澤有徑	13
[ホテル日航大分 オアシスタワー] 蜷川有紀	14
[J:COM ホルトホール大分] 流 麻二果	15
[なぎさやビル] 眞壁陸二	16
ウォールアート	17
[小鹿公園] 井川惺亮	18
[ふないアクアパーク] 大平由香理	19
[Bスクエアビル] 国本泰英	20
公募作品	
[なかの座] かおなし まちす	21
[たけまちマルシェ] 大塚ひかり 永添楓恋 吉田茉由 (Sign Lab)	22
アートイベント	
大分市アートを活かしたまちづくりシンポジウム 回遊劇場 SPIRAL アーティストトーク	23
「伝承駄美術 ダルマめぐり」現代美術二等兵	24
「黒板家族 ～平和をつくる者～」西村正幸	25
ディレクターズツアー 廉太郎に染まる街おおいた	26
会場運営	27
アーティストプロフィール	28
広報活動	32
報道記録	33
MAP	35

ごあいさつ

大分市アートを活かしたまちづくり推進会議
会長 姫野昌治

2015年に開催された第1回目の大分市のアートフェスティバルである「おおいたトイレンナーレ 2015」は、文化芸術の力をクリエイティブなまちづくりに活かすユニークなイベントとして世の注目を浴びました。

その成果を、次のアートフェスティバルにも引き継ぎ、地方創生にと発展させる目的で2016年9月に「大分市アートを活かしたまちづくり推進会議」を立ち上げ、翌年1月に同推進戦略を策定しました。その中で第2回アートフェスティバルを「ラグビーワールドカップ2019™日本大会」に併行して開催することを決めました。

また、2018年に開催された、「第33回国民文化祭・おおいた2018」「第18回全国障害者芸術・文化祭おおいた大会」のリーディング事業「回遊劇場〜ひらく・であう・めぐる〜」を第2回アートフェスティバルのプレイベントとして位置付けし、本番に向けての機運を高めて参りました。

2019年9月20日から11月2日にかけて開催した“大分アートフェスティバル2019「回遊劇場 SPIRAL」”では、大分市民や県民のほか、ラグビーワールドカップの試合観戦に訪れた国内外のお客様にも大分のまちを楽しんでいただこうと、大分市中心市街地の様々な建物の内外を舞台に、作品展示やアートイベントを企画実施しました。

お客様には、「まち歩き」を通じて、中心市街地に点在するさまざまなアート作品を鑑賞しながら、同時に大分の豊かな食を味わい、多様な歴史や文化にも接していただけたのではないかと自負しております。

44日間にも及んだ本フェスティバルを成功裏に閉幕することができましたのも、ご参加いただきました大分県内外のアーティストの皆さん、展示会場提供等でご協力いただいた関係者の皆さん、そしてボランティアスタッフの皆さん等々のご支援の賜物であります。

ラグビーワールドカップの感動ともども、このアートフェスティバルが大分市の新たなレガシーとなることを望んでやみません。

結びに、「回遊劇場 SPIRAL」にご参加いただいたお客様と関係者の皆さんに心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

ごあいさつ

大分アートフェスティバル企画委員会
委員長 於保政昭

大分の中心市街地はこの数年、大分駅ビル、県立美術館、祝祭の広場と人々が集まるポイントが次々に誕生し、街全体が活気に溢れる発展を遂げています。

市街地で行われるアートフェスティバルは、普段何気なく過ごしていた空間にアートを設置することで、街の魅力に加えて新たな発見と交流を作り出す力を持っています。企画委員会ではディレクターと共に、ラグビーワールドカップ2019™日本大会のおもてなしに併せて、これまでにない芸術文化との出会いと、街の魅力を記憶する機会を、市民と共に創りあげていくことをイメージして企画を進めて来ました。

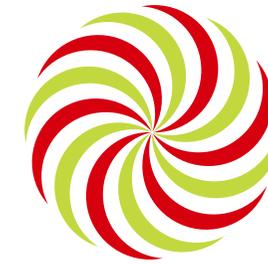
「おおいたトイレンナーレ2015」では、古くからある公園のトイレがアートの力によって新たなランドマークになり、そのレガシーを受け継ぎながら、今回は大分合同新聞社の旧輪転機室・旧紙庫という、近代の遺構とも言える未知の空間を「回遊劇場 SPIRAL」のメイン会場として、インスタレーション、ウォールアートやアートイベントなど、国内外のお客様を巻き込んで、市街地を回遊し、巡ることで隠れた街の魅力を体感するアートフェスティバルとなりました。

このフェスティバルは、市民自らが主体となって劇場都市 SPIRAL をつくりあげました。展示場所をご提供いただきましたホテルや商店街の皆様、ボランティアでは「おおいたトイレンナーレ」から引き続き活躍していただいている「ポールさん」に運営を支えて頂きました。そして、鑑賞者のみならず、ご協力いただいた多くの皆様方に、深く感謝申し上げます。

はじめは取っ付き難い現代アートは一見難解に捉えられがちですが、アーティストの自由な発想と多様な価値観の融合に触れたとき、多くの方が不思議と魅力を自ら個性豊かに発信するのです。それは「格別」なことに触れているからに他なりません。つまりこれこそが活きた原動力であり、この地において、未来を切り拓く新たな人材を生み出していると感じています。

大分市のアートを活かしたまちづくりは、公的援助を受けて今までにない「格別」な知的活動の機会を得ています。アート活動は時として多数派社会を刺激する機会にもなります。それは自由を守り社会の多様性を認め、考える機会でもあり、これからもアートを活かした取り組みが継続することで、地域社会の芸術文化発展に繋がると確信しています。

今回の企画も市民を巻き込む原動力としての発展と公益に留まらない「SPIRAL」が活かされることに期待します。



回遊劇場
SPIRAL
OITA ART FESTIVAL 2019

大分アートフェスティバル2019

会期：2019年9月20日(金) — 11月2日(土)

会場：大分市中心市街地 各所

「回遊劇場 SPIRAL」は2018年に大分市で実施した「回遊劇場～ひらく・であう・めぐる～」の続編となるアートフェスティバルである。大分市はこれまで、「おおいたトイレンナーレ2015」や「回遊劇場～ひらく・であう・めぐる～」などのアートフェスティバルの開催に加え、地下道アートの設置などでアートを活かしたまちづくりをすすめてきた。「回遊劇場 SPIRAL」ではそのレガシーを引き継ぎ、ラグビーワールドカップ2019™日本大会などで大分市を訪れる国内外のお客様をおもてなしするとともに、市民自らが主体となって参加し、楽しむことで劇場都市大分市が SPIRAL(渦)となり、大分市の魅力を発信することを目指した。

企画概要

インスタレーション

現代美術アーティストの作品の展示

ウォールアート

招待アーティストや、公募で選ばれた県内のアーティストによる壁画の制作

アートイベント

アーティストによるワークショップやトークなどの実施
ディレクターによるアートツアーの実施

パブリックアート

既存のパブリックアートの紹介

SPIRAL - 都市の現場のために

「回遊劇場 SPIRAL」ディレクター・大分市美術館館長
菅 章

はじめに

「回遊劇場 SPIRAL」(以後 SPIRAL)は「ラグビーワールドカップ2019™ 日本大会」の期間中に大分市で開催されたアートフェスティバルで、2018年に実施した「回遊劇場～ひらく・であう・めぐる～」の続編である。

都市を劇場や美術館に見立て、回遊性を持たせるというコンセプトやウォールアート(壁画)、空き店舗、パブリックアートを舞台にするというスタンスも前回から引き継いでおり、大きな変更はない。

今回異なる点は次の4点である。まず1つ目はアーティストの大半が県外在住である点だ。ラグビーワールドカップという世界最高峰のラグビーの祭典にふさわしい内容とするため、世界で活躍するアーティストの最先端の作品との出会いを創出する機会とした。特にサイトスペシフィック(特定の場所での特性を活かして制作する表現)で展開するインスタレーション(架設)に関して、大分をどのようにとらえるかという外の視点を重視した。2つ目には、ウォールアートの一部(シャッターアート)を公募制にして、若い大分のアーティストへ参加を呼びかけたことである。3つ目にインスタレーション設置場所として、オルタナティブスペース(既存のものにとってかわる場所)であるホテルや公共的施設(ホルトホール大分)を加えた点である。これはまさに出会いの場、歓迎・交流の場として機能させるための役割だといえよう。4つ目は、メイン会場となった大分合同新聞社旧輪転機室・旧紙庫の圧倒的存在感と未知の場所でのインスタレーション展示である。

以上、これら4つの変更点及び成果や課題を踏まえながら、今回のSPIRALを振り返ってみたい。

1. 展覧会の構成と仕組み

展覧会を構成するにあたり、場所の持つ空間的特性はもちろん、都市の構造や文脈を読み解きながら作家、作品の選定や配置を行い、回遊性の仕組みを構築することとした。

(1) 都市の構造とエリア設定

現在の大分市中心市街地の構造は、広い道路によって南北、東西に分割されている。大分駅高架によって連続性ができたとはいえ、駅や国道197号線の南北で街区の性格はかなり異なる。東西では中央通りで分割された中央町、府内町がそれぞれ特徴をもって存在している。今回、作品の配置をするうえで大きく3つのエリアに分けて考えた。

エリア設定

① 駅南エリア～

J:COM ホルトホール大分 レンブラントホテル大分

② 中央通り西エリア～

中央町、ホテル日航大分 オアシスタワー、
小鹿公園、ガレリア竹町

③ 中央通り東エリア～

府内町、なぎさやビル1F、
大分合同新聞社旧輪転機室・旧紙庫

(2) アーティストの選定

アーティストは次頁のように分類できる。ここでは、大分(土地)とのかかわりという側面で分類した。他にも世代、メディア、ジャンルなどで分けることができるが、いずれにせよ、インスタレーションや壁画などにおいて、サイトスペシフィックに対応し得る優れた

アーティストであることが前提条件になる。

アーティスト

- ① 初めて大分と関わる(作品展示する)作家
(倉重光則、曾谷朝絵、流麻二果、蜷川有紀、西村正幸)
- ② 数度訪れた(展示した)ことがある作家。
(井川惺亮、岩澤有徑、原口典之、現代美術二等兵)
- ③ 大分在住、ゆかりの作家
(大平由香理、国本泰英、公募作家の4名)
- ④ その他 アーティスト・イン・レジデンス(6か月)による滞在
(眞壁陸二)

(3) 回遊性の仕組み

回遊性の仕組みはこの展覧会のミッションを果たす上で都市の構造と場所の機能、さらにアーティストの特性、興味が一致したところで決定される。大きく分けて、①ホテルなど来街者の入口となる場所。②壁画やパブリックアートなど移動時に目に触れる屋外の作品。③空き店舗や使用を終えた深く入り込んだ倉庫などの場所。④営業中の店舗のショーウインドウへの設置とアートツアー。⑤参加・体験型ワークショップなどである。①～③は場所で④～⑤は活動が中心。まとめると下記ようになる。

作品設置場所及び活動の機能

- ① 入口・出口～
ホテルや公共施設など来街者が多く集まる場所
- ② 通路・舞台背景～
壁画、シャッターアート。まちの通路で回遊劇場の

書割的舞台背景

- ③ 迷宮・発見～
都市の深部に入り込んだ場所。大分合同新聞社旧輪転機室・旧紙庫、空き店舗等。
- ④ 周遊・ツアー～
ディレクターズツアー、伝承駄美術 ダルマめぐり
- ⑤ 参加・体験～
黒板家族～平和をつくる者～、アーティストトーク等

このような仕組みとアーティストの組み合わせ、調整によって展覧会を構成した。

2. 都市型フェスティバルという難題(アボリア)

10月6日に「祝祭の広場」でSPIRALのイベント、アーティストトークを開催した。パネラーの一人、眞壁陸二は、都市型アートフェスティバルでの屋外展示のほとんどがまだ上手くいってないと語り、都市空間における展示の難しさを指摘した。都市の商業施設は建築、店舗デザイン、広告看板、ショーウインドウなど視覚的刺激に溢れており、過剰な情報が作品を埋没させるからだ。アート作品が目されるには、周囲を圧倒する規模を持つか、鑑賞の妨げになりにくい場(ステージ)が用意できるかである。また、管理上の問題もある。自由に出入りできる場所では、作品の盗難、汚損などからの保護や危険防止なども必須で、そのための監視で人件費が膨れ上がる。

インスタレーションだけでなく、壁画の場合も同様で、地権者との交渉や景観条例等への対応といった基本的な事案から、実現可能としても、足場の設置費や駐車場の借上げ料(壁画に適した場所の大半は、

駐車場に隣接する) などハードルは高い。そしてここでも、スケール感やインパクトが都市空間の中での試金石となる。

このような屋外、とりわけ都市部でのフェスティバルは、予測がつきにくく、難題が山積する。実際、今回の現場でも、予期せぬ事態への対応で、アーティストや関係者に対しての配慮不足、調整不足など行き届かない点があったことをお詫びしたい。

3. 劇場の現場

SPIRALは4つのカテゴリで構成した。それはインスタレーション、ウォールアート、アートイベント、パブリックアートである。個々の作品については、アーティストの頁で紹介するので割愛し、それぞれ現場での成果や課題を含めた報告をする。

(1) インスタレーション

インスタレーションは大分合同新聞社旧輪転機室・旧紙庫、なぎさやビル1F、レンブラントホテル大分、ホテル日航大分 オアシスタワー、J:COM ホルトホール大分の5ヵ所。同じオルタナティブでも、設置される場所で、人々の作品との向き合い方は大きく異なる。すなわち出会い易く、作品を認知し難い場所か、探索困難で、隔離され鑑賞し易い場所かによってである。

前者で展示難度が高いのがホテルのロビーである。そこは顧客のための設えが備わっており、これ以上足す必要がない分、制約も多い。その隙間に入り込むには、それ相当の仕掛け、テーマやストーリーがなければならぬ。ともにプロジェクトを使用し、岩澤有徑は「グローバルズムと地域性」というテーマ、蜷川有紀はダンテの「神曲」というストーリーを展開した。そして、難しい条件をクリアするサイトスペシフィックな

感性で、それぞれホテルの空間特性を生かしたインスタレーションを試みた。動画映像作品の視覚効果は高く、SPIRALの導入的役割を十分に演じてくれた。

J:COM ホルトホール大分はラグビーワールドカップの公式ファンゾーン傍の人が集中する場所に位置する。そのガラス面に透明カラーフィルムによるインスタレーションをしたのが流麻二果。自身の色彩というテーマをワークショップによって他者性を導入するとともに、内と外の虚実皮膜ともいえる建築のガラス面に文字通り色彩の被膜を施し、天候、時間、環境などの乗数をシンクロさせながらメディア化した。人の動きが激しい場所で、美しく彩られたフィルムによってまちの景色に入り込んだ。

2016年6月、大分合同新聞社は市内佐野地区に新印刷センター完成を機に、本社の輪転機室等を閉鎖した。工場跡を髣髴させる天井高15m、4階吹き抜けの700㎡近い巨大な空間は、後利用が検討されているものの、封印されたまま今日に至っている。昨年、この場所を見た時、メイン会場になると確信した。ここで曾谷朝絵、原口典之、倉重光則がインスタレーションを展開。曾谷は旧輪転機室の空間で布を使ったプロジェクションを計画。原口は今回、旧輪転機室にて意欲的な新作で臨んだ。ネオンやLEDを使用する倉重は外光が遮断できる旧紙庫を希望。曾谷の重層的な色彩空間の夢幻性、原口の75色の物質の物量と場所への意思、倉重の発光体による空間の演出など媒体や表現は異なるが特殊な場所と対峙する作家の執念は手ごわい大空間に新たな意義を与えた。また、この場所はボランティアスタッフ「ボールさん」が集う「回遊アートセンター」というインフォメーションセンターとしても機能させた。

金沢在住の画家眞壁陸二は、今回中国蘇州市で開館する新設の美術館のための大型絵画作品の制作場所を探していた。大分市のアートレジオン（廃校を活

用したレジデンス)を紹介すると5月末には大分に転居して制作を開始した。大分に約半年滞在するというのでSPIRALへの参加を要請。屋外の壁画を依頼したが、屋外よりも閉じた場所を希望したため、なぎさやビルの空き店舗を提案し決定。探索困難な場所だが、ブロックの無造作な壁が眞壁のカラフルな作品群を浮かび上がらせる会場となった。

(2) ウォールアート

まちなかの公共的空間として展開するウォールアートは、近年、再注目されつつある。入口・出口から移動するときに偶然出会う場所であり、まちの背景、劇場舞台の書割の役割である。しかしこれらは、残されることでパブリックアートにもなる。壁画の制作はフェスティバル開催の2か月ほど前から始めてもらった。その理由として、開催直前に施工が集中しないようにすることと、壁画は基本的に公開制作なので、広報、話題づくりになると考えたからだ。ウォールアートは地元在住のアーティストが多いため、実現が可能であった。しかし、7月～8月は猛暑日が多く、梅雨や台風の影響もあり、計画通りにいかなかった。各作家は、猛暑を避けるため、早朝や夕方以降に制作を行った。

長崎の井川惺亮には自身の過密なスケジュールと梅雨と台風の影響の中、数度に分けて滞在制作してもらった。小鹿公園の公衆トイレをカラフルで美しい寶石箱のような存在にしてくれたことで、周囲の環境が明るく様変わりし、人々が集う場所となった。

岐阜県出身の日本画家、大平由香理は現在別府市在住。VOCA展などにも大作を出品している若手作家で、末広温泉浴場での壁画制作経験もある。大平はアクアパークの南側の17mの塀で壁画に挑戦し、台風、酷暑、梅雨の中、二ヶ月かかり仕上げた。

国本泰英は府内町のBスクエアビルで制作。西側

に隣接したビルが取り壊されたため、コンクリートの壁面が露呈。この3F、4F部分に人型のイメージを無数に描いた。真夏日の屋外作業、しかも高所とあって、安全対策に腐心した。都市のエアポケットに出没する不思議な群像は地味だが味わいのある風景となった。

ガレリア竹町は歴史のあるアーケード街だ。近年、老舗小売店が減少し、飲食店が増加する傾向にあり、シャッターが下りたままの空き店舗も少なくない。そんな竹町の「たけまちマルシェ」と呉服店「なかの座」でシャッターアートを展開。このうち「たけまちマルシェ」は県内のアーティストのチャレンジ枠(公募)にした。それは将来を担う創造的な人材の育成や市民参画を促すという狙いもあったからだ。「大分市の魅力を発信できるフォトジェニックな作品」というオーダーで募集し、32点の応募があった。

高さ6mを超える「なかの座」の巨大シャッターは招待作家用であったが、希望がなく、公募作家の第1席のアーティスト「かおなしまちす」に制作を依頼。彼女は3段のローリングタワーを駆使して1か月にも及ぶ作業をほとんど1人でやり遂げた。長期の制作ゆえ、通りを歩き交う人々とのコミュニケーションも日常的に行われたようだ。

「たけまちマルシェ」は間口が広く奥行のない店舗で、以前八百屋が営業していた。区切られたシャッターのうちの3枚が公募作品のスペースとなった。吉田^{まゆ}由(SignLab)、大塚^{なご}ひかり、永添^{ながそま}楓恋の3人は、大分県立芸術文化短期大学の卒業生(以後芸文短大)と在学生。

若い挑戦者たち4名の作品はいずれも地域を誇る気持ちがかもったフォトジェニックなイメージで、ラグビーワールドカップで賑わう竹町通商店街の歓迎ムードを演出した。



(3) アートイベント

アートイベントはアーティストと直接触れ合う場であり、市民自らが参加して楽しむ機会である。西村正幸のワークショップ「黒板家族～平和をつくる者～」と現代美術二等兵の「伝承駄美術 ダルマめぐり」は「芸短フェスタ 2019」による芸文短大グラフィックアートコースとの連携企画で実施した。アーティストと市民の間に学生が入ることで、市民に親しみやすくアートをまちなかで体験してもらうことができたし、次世代を担う若者のチャレンジ精神は、さまざまな場面で発揮された。このほか会期中のアートツアーとしてディレクターズツアー、「ポールさんとめぐるまちあるきツアー」、アーティストトーク、そしてラグビーワールドカップ期間中のおもてなしイベント「廉太郎に染まる街 おおいた」などを開催した。

(4) パブリックアート

市内に点在する野外彫刻や「おおいたトイレナレー 2015」で制作したトイレ作品、地下道アート、「回遊劇場～ひらく・であう・めぐる」で制作したウォールアートなど数多くの作品が市内中心部にある。これらをパブリックアートとして位置づけることで、回遊のアイテムを増やすとともに今後のフェスティバルなどで制作したウォールアートなどがストックされ、アートを活かしたまちづくりのレガシーとなっていくことを目指している。

おわりに

ラグビーワールドカップは大分にとって文字通り渦そのものであった。これほどの盛り上がり誰が想像できただろうか。スタジアムはもとより、パブリックビューイング会場となったファンゾーンや「祝祭の広場」の熱狂の渦は、まさに都市を祝祭空間に変えたといっ

ていい。それに対して「回遊劇場 SPIRAL」の渦はささやかなものであったのかもしれない。

それでも、振り返ってみると SPIRAL は大分の食、歴史、文化、音楽などさまざまなイベント同様、ラグビーワールドカップの熱狂の中、それを支え、輝かせることによって都市に厚みと懐深さを与えたと感じている。例えばラグビーワールドカップの応援で滞在中の外国人たちが「回遊アートセンター」を訪れた際に、思わず見せた歓喜の姿や各イベント参加者の楽しそうな反応(リアクション)を見た時など、その思いを強くした。

これはアートの力としか言いようがない。アーティストは限られた条件の中で、大分独自の地霊^{グニスロキ}といえる場や空間と向き合い、そこでしか成立しないサイトスペシフィックな作品をつくった。それは優れたアーティストによるまちの批評的問いかけや提案であり、人々にさまざまな気づきを与え、新たな風景の発見や場所の可能性への想像力を膨らませることである。また、今回アーティストを影で支えたインストラー、ボランティア、事務局スタッフが、自らプレイヤーとなって都市の現場でまちの魅力を発信することこそ、この活動の意義でもある。

特に「おおいたトイレナレー 2015」以来、まちに深く興味を持ちアートやまちなかを紹介・発信してくれた「ポールさん」の活動は、場所や人をつなぐメディアウムであり、自ら楽しむことで SPIRAL を魅力的にしたと思っている。

最後に、今回 SPIRAL に関わっていただいたアーティストをはじめまちの全ての協力者たちに心から感謝申し上げこのレポートを終わりたい。

Installation Art

インスタレーション

インスタレーションとは、展示空間を含めた空間全体を作品として表現する手法である。

今回メイン会場となるのは大分合同新聞社内にある旧輪転機室と旧紙庫。

かつては毎日慌ただしく新聞を刷っていた壮大な吹き抜けの空間で、

3名の作家が作品を展開した。

また、滞在の拠点となるホテルやラグビーワールドカップの

公式ファンゾーンの近くなどに4名の作家が作品を設置し、

国内外から来るお客様をおもてなした。

【大分合同新聞社旧輪転機室・旧紙庫】

倉重光則

曾谷朝絵

原口典之

【J:COM ホルトホール大分】

流 麻二果

【なぎさやビル】

眞壁陸二

【レンブラントホテル大分】

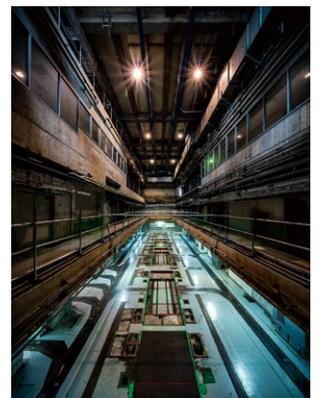
岩澤有徑

【ホテル日航大分 オアシスタワー】

蜷川有紀

大分合同新聞社旧輪転機室・旧紙庫

大分合同新聞社本社内にある1階から4階まで天井高約15mの吹き抜けの大空間。1995年～2015年まで大分合同新聞の印刷工場として稼働していたが、2016年、大分合同新聞創刊130周年の記念プロジェクト事業の一環として、大分流通業務団地内に印刷センターを新たに開設し工場を移転。その役目を終えた現在、関係者以外は建物内に立ち入ることができないが、今回は特別に会場としての利用が許された。(写真：大分合同新聞社旧輪転機室)



【凡例】

このカタログは作家名、作品名、素材、サイズ、制作年、設置場所の順に記載している。作家作品解説は、「回遊劇場 SPIRAL」ディレクターの菅が担当した。



倉重光則

KURASHIGE Mitsunori

真青な風景

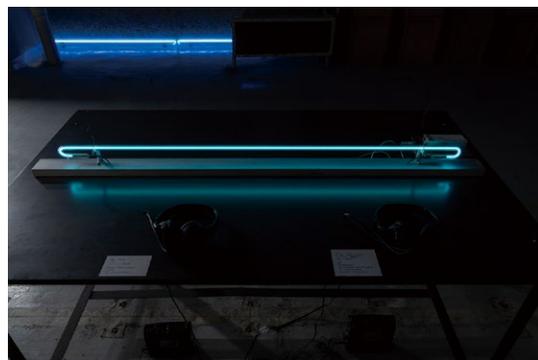
Blue Scenery

ネオン、サーチライト、鉄、LED、FRP、CD-R (朗読、音楽)、etc

2185 × 700 × 1497 cm

2019

[大分合同新聞社 旧紙庫 府内町 3-9-15]



倉重光則が会場としたのは、大分合同新聞社旧紙庫。かつて巨大なロール状の新聞用紙を保管した場所で、現在は新聞社の創業以来のアーカイブ保管庫として使用されている。四方がコンクリートに囲まれた4階吹き抜けの閉じられた空間は、ゴシック建築の身廊を思わせる。倉重は正面突き当りの2階部分に青色のLEDライトを仕込んだ人型の樹脂《EBE》という地球外生命体を設置し、視線を上方に導いた。また壁際の床には青のネオン管を走らせ、奥行の空間を誘導する水平軸を演出。これら青い発光体が部屋全体を崇高な「真青な風景」へと変えた。また入り口近くの左側壁面に方陣状に設置した16基の白色LEDライトは5分ごとにライトの数が切り替わり、場面の転換がなされる。中央の鉄製の机には2基のヘッドホンが設置され、音と光に満ちた空間で人はしばし瞑想的な時空間を過ごすことになる。

曾谷朝絵

SOYA Asae

宙(そら)

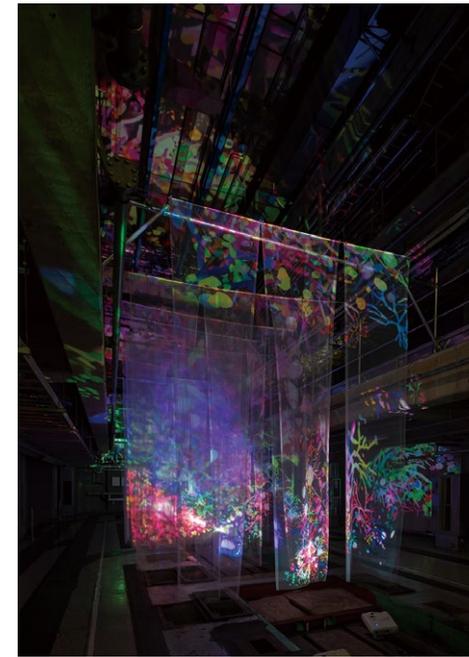
sora

アニメーション、布

2210 × 1125 × 1497 cm

2019

[大分合同新聞社 旧輪転機室 府内町 3-9-15]



曾谷朝絵は、日常身近にあるものをモチーフにし、身体感覚を光と色彩に昇華する絵画やインスタレーション等で知られるアーティストである。今回は大分合同新聞社の旧輪転機室の巨大空間で「創造の森」を視覚化した、大掛かりな映像インスタレーション《宙(そら)》を展開。天井高15mの吹き抜けに光を透過する布を幾枚も重ねて垂らし、12基のプロジェクターで、曾谷が描いた水彩画を3種類のアニメーションに編集したものを投影した。アニメーションをさまざまな角度からプロジェクションすることで、重なった布から次々と光を通し、複雑で幻想的な色彩の森が立ち上がる。重なりながら刻々と変化するアニメーション映像は、重厚で存在感のある空間を色彩感溢れるファンタジックな宇宙に変容させた。我々の身体は光と色彩の森に抱かれ非物質的な夢幻世界を彷徨する。





岩澤有徑

IWASAWA Arimichi

No.061210 (Left) No.050611 (Right)

LED、アクリル
180 × 180 × 10cm
2011
大分県日田市蔵

The World Famous Project IX

DVD
500 × 160cm
2014-2019

The World Famous Project XVII

DVD
160 × 60cm
2017-2019

[レンブラントホテル大分 エントランス 田室町 9-20]

レンブラントホテル大分のロビーの階段の壁、床などを利用した岩澤のインスタレーションは完備されたホテルの空間の隙間に絶妙に仕掛けられている。まず、エスカレーター下の屏風状に二曲されたLEDの作品《No.061210 (Left) No.050611 (Right)》は、そもそも平面作品であるが、自立することにより立体的な装置として、存在感を発揮する。ある音楽の楽譜に同期しながら点滅する円形のLED電球は地球が象徴化されたコンステレーションとなり、世界で活躍する岩澤のグローバルな世界観を示している。一方、プロジェクターで映した映像は、鯛の大群と優雅に泳ぐクラゲの群れ。水族館で撮影したというこれらの映像は、島国日本では見慣れた光景だが、床や階段の壁に映写することで、非日常的な時間や場所の意味を覚醒させる。ホテルという困難な状況にあえて挑戦した岩澤のアーティスト魂を感じたインスタレーションだといえる。



原口典之

HARAGUCHI Noriyuki

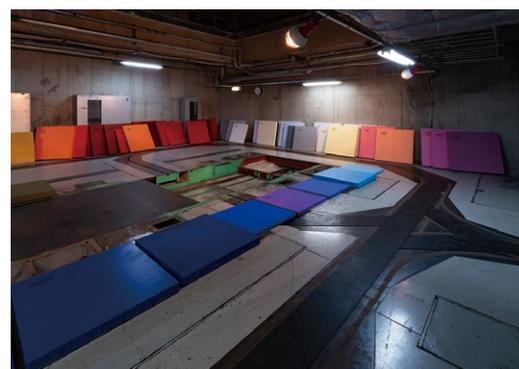
色彩 / 物質

Color's / Substance

ペーパーハニカム、合板、ポリウレタン、アクリル、シルクスクリーン
1585 × 1125 × 1497cm
2019

[大分合同新聞社 旧輪転機室 府内町 3-9-15]

「作品自体が、積極的に何かを発言・表現するのではなく、周辺や人々を際立たせる活性として機能してゆく」と語る原口は、常に物質そのもののあり様や場の生成を制作の起点に置いてきた。鉄やポリウレタンといった工業製品や廃油を充たしたオイルプールなど物質そのものを提示してきた原口が今回挑んだのは、新聞社の旧輪転機室。ポリウレタンを流し込んだジュラルミンのハニカムの矩形の支持体に色彩を塗り込み、75色のカラーチャートの物体 79 × 79 × 4 cm、90 × 90 × 9cm として設置した。この新作は、これまでの原口を知るものに驚きを与えたに違いない。かつて輪転機室であった空間で、近代から現代の文明を支えた印刷という人間の営為を、機械的な色彩を施しつつ物質に還元していくことによって場を批評する原口の見方は、色彩という網膜の刺激さへも、質量を持った物質として存在することを示唆するのだ。





蜷川有紀

NINAGAWA Yuki

薔薇の神曲

Divine Comedy in Roses

プロジェクションマッピング

原画：岩絵具、和紙

天井 直径 600cm、柱 200 × 800cm

2017

【ホテル日航大分 オアシスタワー エントランス 高砂町 2-48】



10代で女優デビューし、近年は画家として旺盛な制作を続ける蜷川有紀。今回のインスタレーション作品は、彼女がここ数年テーマとして取り組んでいるダンテの「神曲・地獄篇」を岩絵具で描きあげた《薔薇のインフェルノ》という絵をプロジェクションマッピングしたものである。ホテル日航大分のファサードからロビーに入ると、吹き抜け部分に2本の円柱が円形の天井へと延び、それを囲む様な階段が2階バルコニーへと続き、まるで劇場のようである。蜷川はそのロビーの象徴ともいえる円形天井と2本の柱にアニメーション動画をプロジェクションした。原画は材質感のある赤や青が宝石のようなゴージャスな輝きを放っているが、映像からもそれは十分伝わってくる。美しい色彩とユーモラスで詩情あふれる表情でゆっくりと動くダンテの世界は国内外から訪れた多くの人々の目を楽しませた。

流麻二果は「IROMIZU」という透明装飾用シートを使ったワークショップを8月25日に開催した。27名の参加者はそれぞれ「今の日本の色」というテーマで自身が選び配色した3色を重ね合わせることで、日本や自身と向き合うことになる。作品を持ち帰った流は、J:COM ホルトホール大分のガラス面に27名の作品を基にレイアウトし、インスタレーションプランを完成させた。参加者と流のコラボレーションによる《2019年の日本の色》は、まるでステンドグラスのように美しく、ラグビーワールドカップの公式ファンゾーンのすぐ横で、多くの来場者の目を楽しませた。その多様な色彩は大分で試合があるファンゾーンに設えられた各国のカラフルなバナーやまちの景色とも響き合い、溶け込んでいった。夕日を浴びると室内の床に優しく投影され、夜になると館内の光によって宝石のように照らし出される色彩は大分の色となった。



ワークショップ「今の日本の色」を見つけよう

【8月25日(日) 13:00-15:00 J:COM ホルトホール大分 2階 202会議室】

流 麻二果

NAGARE Manika

2019年の日本の色

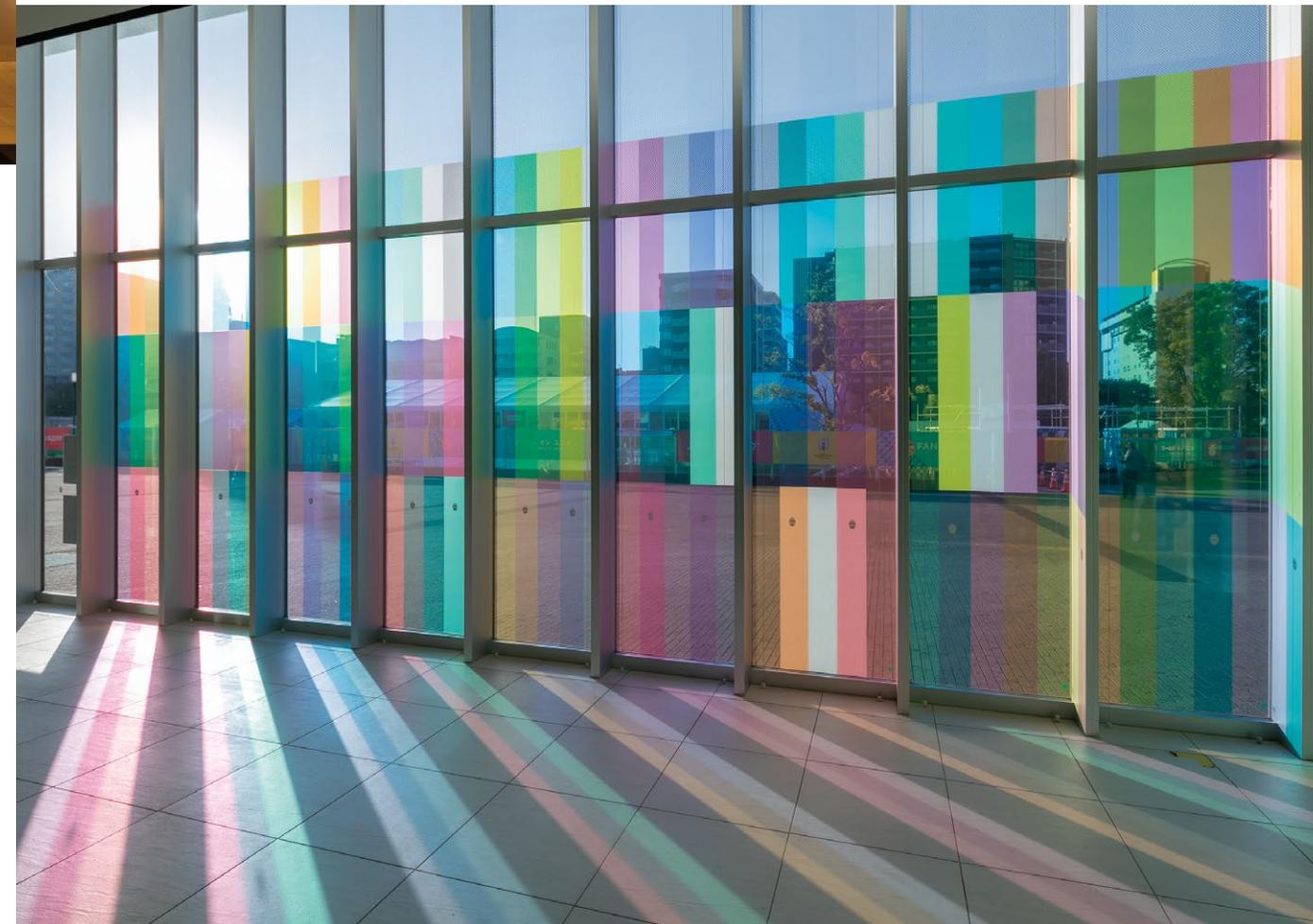
Colors in Japan, 2019

透明装飾用シート「IROMIZU」

760 × 350cm

2019

【J:COM ホルトホール大分 正面玄関ガラス面 金池南1-5-1】





眞壁陸二

MAKABE Rikuji

Community / 共同体

合成塗料、板
約 50 × 30 cm (多数)
キャンバスにアクリリック
65 × 53 cm (4点)
2019
[なぎさやビル 1F 府内町 2-2-15]

眞壁陸二の展示場所は、狭い路地を入ったビルの空き店舗。眞壁は、老朽化したコンクリートブロックの壁に、大小さまざまな板材を数枚組み合わせたカラフルな作品を多数設置した。ランダムに壁に設置されると、壁全体が地と図の関係性の中で有機的に立ち上がり、生き生きとした場を形成した。《Community / 共同体》と題されたこの作品は、個人である一つの木片が組み合わさって家族をつくり、さらに村、都市、国へと広がる姿を象徴しており、色彩とイメージ、形態と環境が複雑に絡み合いながら、相互に繋がらう。右手の壁の4枚の絵画は、オーロラをイメージして描かれたという。ここでも描かれた樹木のイメージが、光沢を伴った背景と同期し、見る角度によってネガポジ反転する。そこには差異や類似性などを認識しながらも認め合う、多様な価値観を許容する社会への願いが込められている。



Wall Art

ウォールアート

3名の招待アーティストに加えて、公募で選ばれた4名の県内アーティストが、まちなかにある建物の壁面や商店街のシャッターに壁画を制作。まちの拠点をつなぎ、思いがけないアートとの出会いを演出した。

【小鹿公園】
井川惺亮

【なかの座】
かおなし まちす

【ふないアクアパーク】
大平由香理

【たけまちマルシェ】
大塚ひかり
永添楓恋

【Bスクエアビル】
国本泰英

吉田茉由 (SignLab)





井川惺亮

IKAWA Seiryō

Peinture

アクリル

268 × 464 × 196cm

2019

[小鹿公園トイレ壁面 末広町 2-3-13]



井川惺亮は我が国では珍しい南仏のシュポール/シュルファスの作家、クロード・ヴィアラの薫陶を受けたアーティストである。支持体と表面の関係を分析し、物質的要素、形式的要素、制度的要素に解体、再構築するというアバンギャルド最後の実験は、もの派やミニマルアートとの類似性を見せながらも、常に絵画の問題系を追究する。

今回、井川惺亮に依頼したのは公園の公衆トイレの壁画である。大分駅の高架に伴い整備された道路と公園の周囲には産院、マンション、保育園、企業ビル、寺などがあるが、このトイレは、ほとんど意識されない場所であった。井川は既製のコンクリートの壁を、白色の下地で塗り、その上から赤、青、黄の三原色とそこから派生した6つの色彩をストロークを用いて着色。宝石箱のようなカラフルで明るい色彩は周囲の環境を一変させた。

大平由香理

OHIRA Yukari

時を遊ぶ

through

水性塗料

170 × 1700cm

2019

[ふないアクアパーク南側 溝口ガレージ壁面 府内町2-3]

若手の日本画家大平由香理に今回壁画を依頼した。場所は「ふないアクアパーク」の南側通路に面したガレージの塀である。ここは水をテーマとした公園だけに水路や噴水が数多く設えられており、まちの中心部でありながら、喧噪を忘れられる憩いのスポットとなっている。そのような場所を意識した大平は《時を遊ぶ》というタイトルで、巨大な魚がゆったりと泳ぐ姿を描いた。淡くさわやかな色使いで美しく波打った模様で着色された魚は、リュウグウノツカイを思わせる優雅さで、軽やかにヒレをなびかせて、時空を泳いでいる。約17mある壁面は公園の背景であると同時に、通路であり、公園に面した飲食店の導入部にもなっており、そこを通行しながら絵の中に入り込む感覚を味わうことができる。





国本泰英

KUNIMOTO Yasuhide

Scene

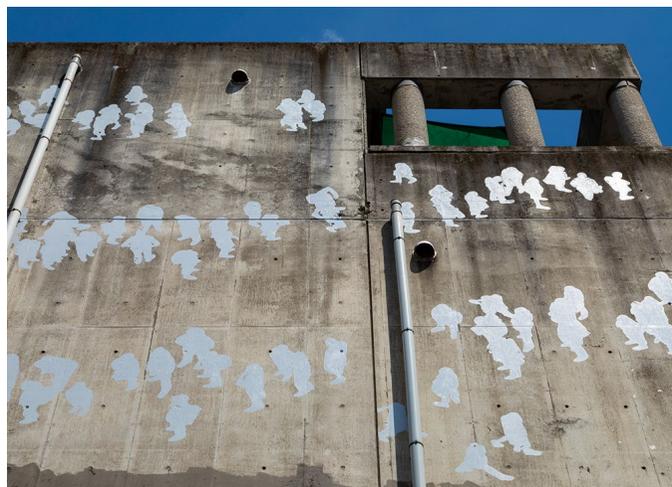
シリコンアクリル樹脂塗料

800 × 1300 cm

2019

[Bスクエアビル壁面 府内町 1-6-43]

国本泰英は、自身の生活を取り囲む情景や、インターネット、雑誌などで得たさまざまなイメージの中から人型のシルエットを描く絵画作品を制作している。連なる行列、行き交う交差点、広場などの曲面で人は「個」という存在よりも群像の一員となる。そこで「個」としての人間が、群れとなった時、固有の要素が削ぎ落とされ、フラットな「人」へと変移していくと国本は言う。2度目の壁画挑戦となった今回は、「Bスクエアビル」の巨大壁面が舞台となった。ビルの3F～4F部分という高い場所に足場を組んでの作業では、やや俯瞰気味に群像をグレーで描き、一見コンクリートの壁のシミに見えるが、時間天候などによって見え方がさまざまに、まさに国本の考える曖昧な存在としての「人」が群像の中から浮かび上がる。味わい深く、想像力が広がる壁画作品である。



公募作品 シャッターアート

ウォールアートのひとつとして、ラグビーワールドカップ 2019™ 日本大会で国内外から来るお客様のおもてなしになるようなシャッターアート作品を募集。全部で 32 作品の応募があり、その中から大分市の魅力を発信できるフォトジェニックな作品が 4 点選ばれた。



[なかの座 シャッター 中央町 3-6-2 ガレリア竹町内]

かおなしまちす

KAONASHI MACHIS

歌舞伎

KABUKI

水性ペンキ、ラッカー塗料、メタリックスプレー

620 × 430 cm

2019

かおなしまちすは、なかの座の約6mの高さを持つ巨大なシャッターに挑戦した。大分の特産品や名所にかこまれて、歌舞伎役者がラグビーに興じている姿は、それだけでインパクトがあり、人通りの多いアーケード街でもひととき目を引いた。フォトジェニックと大分らしさ、ラグビーワールドカップという命題を見事クリアした《歌舞伎》は、通りを往く観光客—とりわけ外国人—にとって、印象的なシャッターアート作品だといえる。

[たけまちマルシェ シャッター 中央町2-8-6 ガレリア竹町内]



大塚ひかり

OTSUKA Hikari

animal juice -in Oita-

カッティングシート

280 × 216cm

2019

大塚ひかりの《animal juice-in Oita-》はラグビーワールドカップの出場国にまつわる動物たちがユニフォームを着て、自動販売機の前に集うというイメージイラストである。販売機のアイテムはそれぞれの国の特産品などで、動物たちの語らいが楽しそうである。



永添楓恋

NAGASOE Karen

大分文様

Oita Pattern

カッティングシート

280 × 216cm

2019

日本の伝統的な文様や大分の県産品を市松模様の中に配しており、記者発表のバックボード風に仕上げたデザイン性の高い作品。外国人がイメージする、日本の自然を髣髴させるモチーフと2色のモスグリーンを使った色彩など工夫が見られる。



吉田茉由 (SignLab)

YOSHIDA Mayu (SignLab)

#大分なう

#OitaNow

カッティングシート

280 × 216cm

2019

「#大分なう」を付けて SNS でいろんな方に発信してもらいたいことをねらいとして作られた作品。ピンクのドアの向こうに広がる海と積乱雲は夏の大きなだろう。シタケとかぼすも顔をのぞかせる。そんな異次元へのトリックとトリップにわくわく感が込められている。

Art Event



アートイベント

アーティストによるワークショップやイベントを実施した。

また、市民が自ら参加し、楽しみながら文化芸術に触れられる

アートツアーなどを開催した。



大分市アートを活かしたまちづくりシンポジウム

～大分アートフェスティバル 2019

「回遊劇場 SPIRAL」に向けて～

日時：9月16日(月・祝) 13:00 - 14:30

会場：ガレリア竹町ドーム広場

今回の参加者である現代美術家の岩澤有徑氏の基調講演の後、まちづくり関係者と次世代を担う若者との意見交換を交えて、今後の大分市のアートを活かしたまちづくりを考える意見交換会を実施した。

基調講演：岩澤有徑氏(現代美術家)

意見交換会：岩澤有徑氏(現代美術家)

森晴繁氏(中央町商店街振興組合副理事長)

大塚ひかり氏(大分県立芸術文化短期大学学生)

高島佳奈氏(大分県立芸術文化短期大学学生)

コーディネーター：菅 章ディレクター



回遊劇場 SPIRAL アーティストトーク

日時：10月6日(日) 10:00 - 11:30

会場：祝祭の広場

参加アーティスト3名の作品紹介に続き、まちの住人で中心市街地に詳しいコーディネーターを交えて、「まち」と「アート」の関係を考えるトークを開催した。

アーティスト：国本泰英氏(画家)

眞壁陸二氏(現代美術家・画家)

かおなしまちす氏(公募作家)

コーディネーター：安達了剛氏(府内五番街商店街振興組合理事長)

佐野真紀子氏(株式会社日本政策投資銀行
大分事務所副調査役)



西村正幸 NISHIMURA Masayuki

黒板家族 ～平和をつくる者～

日時：10月20日(日) 13:00-16:00
場所：セントポルク中央町(ダイソー横)

作品展示
期間：10月20日(日)～11月2日(土)
場所：回遊アートセンター

芸短フェスタ2019の連携企画として西村正幸と学生のコラボレーションにより実施したワークショップは、シンプルだが人々を引き付ける要素にあふれていた。家型の黒板オブジェが、アーケード街に並ぶと、家族連れがチョークで思い思いの絵やメッセージを書いていく。通常の黒板塗料よりカラフルで親しみやすく、子どもたちにとって等身大ともいえる犬小屋サイズの家はまさに家族の象徴でもある。ワールドカップや夢色音楽祭などのイベントで賑わう中心市街地でのワークショップは、通りすがりの親子との出会いによって多世代が日常の平和を改めて感じる時間を共有する機会であった。また、家型黒板は、その後回遊アートセンターに移動～展示され、来場者は適宜ワークショップを体験することができた。



芸短フェスタ2019 大分県立芸術文化短期大学グラフィックアートコース連携企画

現代美術二等兵 GENDAI BIJUTSU 2TOUHEY

伝承駄美術 ダルマめぐり

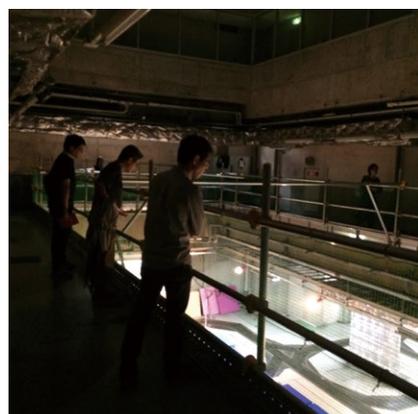
会期：9月20日(金) - 11月2日(土)

展示場所：エトウ南海堂、エミコの野菜食堂、大分銀行赤レンガ館、(株)大分ハット、お菓子の菊家 総本店、お仏壇のたちばな、cafe giraffe カフェジラフ、カフェド BGM、かみ風船 中央町店、五車堂、コトブキヤ 文具店本店、園田ふとん店、大納言、田崎洋酒店、手作り菓子の店 MIYABI、農園きや レモン直販所、ファンキファラゴ、ふとんのまきまん、牧時計店、民芸の店 ぶんご、モリムラ寝装、ヤノメガネ竹町本店、若竹園府内5番街本店、和diningなゝ瀬

駄菓子ならぬ駄美術を標榜する現代美術二等兵(籠谷シェン、ふじわらかつひと)は現代美術に笑いと和を導入したアートユニットだ。今回は彼らの十八番ともいえる、ダルマを学生との協働で実現。パロディ的な二等兵のダルマが商店街の店頭のショーウィンドーに並ぶという仕組みだが、場所の選定、店との交渉や店にちなんだダルマの制作などかなり高いハードルであった。中央町と府内町の特徴的な店、老舗、ジャンルなどを考慮して、24か所の店舗にサイトスペシフィックかつ個性的なダルマが展示された。マップ片手に探しながら、ユーモアと捻りに思わずクスッと笑える瞬間を楽しむ。会期中、彼ら現代美術二等兵と廻ったダルマめぐりツアーには多くの参加者が集い、ダルマの解説を聞きながら駄美術の「楽しさと面白さ」を肌で感じた。

現代美術二等兵によるアートツアー 日時：9月23日(月・祝) 13:00 - 15:00





ディレクターズツアー

9月21日(土)・10月19日(土)・10月26日(土)

「回遊劇場 SPIRAL」のディレクターである大分市美術館の菅館長がみどころを案内した。

廉太郎に染まる街 おおいた

教科書でもおなじみの「花」、「荒城の月」などを作曲したことで有名な瀧 廉太郎。おもてなしの一環として大分市にゆかりのある瀧 廉太郎の素敵な曲をまちなかで流した。

「花」でおもてなし

ラグビーワールドカップ2019™日本大会準々決勝の日に合わせて、瀧 廉太郎の紹介アナウンス(日本語、英語)と「花」を、夢色音楽祭の各会場、商店街、市の施設、大型商業施設で一斉に流した。

日時：10月19日(土) 11:45-11:50

場所：おおいた 夢色音楽祭 2019の12会場、セントポルタ中央町、府内五番街商店街、祝祭の広場、JRおおいたシティ(シティ屋上広場)

廉太郎の名曲でおもてなし

商店街で瀧廉太郎の紹介アナウンスと楽曲4曲(「花」「荒城の月」「箱根八里」「憾」)を流した。

場所：サンサン通り商店街、セントポルタ中央町、府内五番街商店街

会場運営

回遊劇場 SPIRAL インフォメーションセンター「回遊アートセンター」

会期中、メイン会場である大分合同新聞社旧輪転機室・旧紙庫に回遊アートセンターを設置し、案内と情報発信を行った。

場所：大分合同新聞社 府内町 3-9-15



ボランティアスタッフ「ポールさん」

「おおいたトイレンナーレ 2015」や「回遊劇場～ひらく・であう・めぐる～」で大活躍したボランティアスタッフの“ポールさん”が今回も案内役として大活躍。週末にはまちあるきツアーも実施するなど、なくてはならない存在であった。



アーティストプロフィール



井川惺亮 IKAWA Seiryō

現代美術家。1944年内モンゴル生まれ。東京藝術大学大学院修了後仏国政府給費生として1975年渡仏し、マルセイユ美術学校でクロード・ヴィアラ氏に師事。帰国後個展を発表しながら、1984年から長崎大学にて後進の指導にあたる。時に壁面のない漂う空間に挑みつつインスタレーションを試みる。また壁に戻る作品へと向かい、その手法と表現の姿は変化し続けている。



倉重光則 KURASHIGE Mitsunori

現代美術家。1946年福岡県生まれ。日本大学芸術学部美術学科に4年在籍し、退学。1969年頃までシュルレアリスティックな絵を描いていたが、内的イメージを再現して描くことは自分自身の問題であって、アートの文脈(歴史)とは無関係であることに気づいた。その後、新しく「いま、ここ」という思考の現在に立ち、それを通して美術の文脈に交差する為の装置を生み出してきた。光(蛍光灯、ネオン、LED)を素材として、国内外で作品を制作している。



岩澤有徑 IWASAWA Arimichi

現代美術家。1958年京都府生まれ。1981年桑沢デザイン研究所グラフィックデザイン研究科卒。1989年Bゼミスクール修了。東京、名古屋、京都、大阪、神戸、スイス、韓国で個展を開催する中、2001年から3人ユニットUNEASINESSを結成する。近年は、シンプルな映像やLEDを使用した作品と純粋なペインティングの2面性を同時に見せる展開を続ける。



曾谷朝絵 SOYA Asae

現代美術家。神奈川県生まれ。2006年東京藝術大学大学院にて博士(美術)取得。2001年「昭和シェル石油現代美術賞」グランプリ、2002年「VOCA展」VOCA賞、2013年「神奈川文化未来賞」他受賞多数。2011年資生堂ギャラリーにて、2013年水戸芸術館にて個展開催。他ニューヨークや西安(中国)、バーゼルなどで展覧会やパブリックアート制作など国内外で発表多数。2014年文化庁在外研修員としてニューヨークに、2018年TOKAS海外研修員としてバーゼルに滞在。



大平由香理 OHIRA Yukari

画家。1988年岐阜県生まれ。2014年より別府市にあるアーティスト・クリエイターのための住居『清島アパート』に入居。自身が出会った風景と、そこから派生する空想的な光景を組み合わせながら壮大な物語を描いている。主な展覧会に2015年「末広温泉浴場壁画制作」(大分)、2017年「北アルプス国際芸術祭」(長野)、2018年「VOC A展」上野の森美術館、2019年「アーティストインレジデンスつなぎ」(熊本)がある。



©Ken Kato

流 麻二果 NAGARE Manika

美術家。女子美術大学絵画科卒業。2002年文化庁新進芸術家在外研修員、2004年ポーラ美術振興財団在外研修員としてニューヨークを中心に、トルコ等国内外で発表。近年は港区麻布図書館など、空間全体の色彩監修まで関わるパブリックアートを手掛けている。アートに触れる事の少ない子どもたちにアートを届ける非営利団体『一時画伯』発起人。



国本泰英 KUNIMOTO Yasuhide

画家。1984年大分県生まれ。2006年九州産業大学芸術学部美術学科絵画コース卒。国内外での展覧会、アートフェア等を中心に作品を発表している。自身の生活を取り囲む情景や、インターネット、雑誌などで得た様々なイメージの中から人を捉えた絵画作品を制作。『個』と何物でもない『何か』との間を往還する曖昧な存在としての『人』を主題としている。



蜷川有紀 NINAGAWA Yuki

画家・女優。神奈川県生まれ。1978年つかこうへい構成・演出『サロメ』でデビュー。1981年映画『狂った果実』でヨコハマ映画祭新人賞受賞。他、出演作多数。2004年短編映画『パラメラバ』を監督・脚本・主演。2008年絵画展「薔薇めくとき」を開催。同年度情報文化学会・芸術大賞受賞。以降毎年大規模な個展を開催し、話題を呼ぶ。大正大学客員教授、青森県立美術館アドバイザー。



原口典之 HARAGUCHI Noriyuki

美術家。1946年神奈川県生まれ。60年代後半から美術家としての活動をはじめ、1977年国際展「ドクメンタ6」(ドイツ)で日本人作家として初めて選出される。鉄やポリウレタンといった工業製品に使われる素材を用いた作品や、軍用機の形を原寸大で再現させた立体、金属のプールに廃油を満たす作品など、意味や機能をはぎ取りながら、物体あるいは物質そのものの在り様を提示する作品を制作。



眞壁陸二 MAKABE Rikuji

現代美術家・画家。1971年石川県生まれ。多摩美術大学卒業。2000年より画家として活動開始。2008年より壁画の手法を使ったサイトスペシフィックアートとキャンバスペインティングを平行して制作し国内外にて活動。「生と死、無と無限、混沌と秩序」、この6つの言葉をテーマにしている言葉では説明しきれない、自然や生命の神秘と多様性に富む世界の文化や価値観の融合を感覚的に絵画的表現を用いて制作する。

シャッターアート公募作家



大塚ひかり OTSUKA Hikari

大分県立芸術文化短期大学専攻科造形専攻グラフィックアートコース1年。1998年熊本県生まれ。主に動物などのイラストを研究中。ベップ・アート・マンス2019では、グループ展『Parfun』を開催。第42回全国大学版画展、第43回全国大学版画展出品。



かおなし まちす KAONASHI MACHISU

画家・パフォーマー。1987年大分県生まれ。2012年より別府・大阪を中心に芸術活動開始。個展、ライブペイント主催、大阪新世界の奇祭・セルフ祭出店等を経て、2019年別府市の事業、市民学生大同窓会の絵コンテ・装飾デザイン制作を任せられ、活動範囲を大幅に拡大中。負の持つ壮大なエネルギーみたいなものを体現・表現し、意地と根性で発信している。



永添楓恋 NAGASOE Karen

大分県立芸術文化短期大学専攻科造形専攻グラフィックアートコース1年。1999年大分県生まれ。大学では、主に女性を大きなテーマとしたイラストレーション、写真を研究中。ベップ・アート・マンス2019にてグループ展『Parfun』を開催。

アートイベントアーティスト



現代美術二等兵 GENDAI BIJUTSU 2TOUHEY

籠谷シェーン(1967年大阪府生まれ)、ふじわらかつひと(1968年大阪府生まれ)からなるアートユニット。お菓子の世界に駄菓子があるように、現代美術の中にも「駄美術」があっただけではと、ちょっと堅苦しい現代美術にクスッと笑えるスパイスを加え、見る人誰もが楽しめる作品「駄美術」を作り続ける。それぞれが目指しているのは楽しい「おもしろい」作品たち。



西村正幸 NISHIMURA Masayuki

美術家。1957年奈良県生まれ。1983年京都市立芸術大学大学院修了。1983年大阪で初個展以来個展多数。1986年「アート・ナウ'86」兵庫県立近代美術館。1996年 International Work-shop for Visual Artists'96 in REMIEN-BRANDE, Denmark。1996～97年日航財団『空の日芸術賞』を受賞し、ドイツで研修。1988～2018年名古屋芸術大学美術学部教授。



吉田茉由 (SignLab) YOSHIDA Mayu

広告看板店勤務。1996年大分県生まれ。さまざまな看板のデザインその他、プライダルアイテム・カーマーキング・オリジナルステッカー・切り文字・ウィンドウサイン・レーザー加工・ルーター加工等も手がける。印象に残る看板を作るために日々サインラボ(研究)をし続けている。

広報活動

SNS 回遊劇場 SPIRAL 公式 Facebook
 フォロワー数：485人 いいね!数 466件 (2019年11月2日現在)

印刷物 ポスター / B2 1,000枚
 チラシ / A4 二つ折り 20,000枚
 ガイドブック / A5判 32ページ 20,000部
 イベントチラシ / 2種 各1,000枚



グッズ 缶バッジ
 キャンディー
 ラムネ菓子
 ステッカー
 うちわ



会場案内表示 回遊アートセンター
 壁面サイン
 電柱柱巻サイン
 A型看板
 のぼり



新聞広告 大分合同新聞 9/12、10/9
 朝日新聞 9/27、10/13、14、16
 読売新聞 10/18

報道記録

新聞 大分合同新聞 5/15 シャッターアートで竹町彩れ 「回遊劇場」の作品募集
 7/25 大分市で来月開幕 アーティスト16組参加 昨年好評、街中の作品鑑賞
 8/11 ワークショップ参加者募集
 9/13 シンポジウム参加者募集
 9/21 大分市中心部で「回遊劇場 SPIRAL」
 9/24 四重奏
 10/4 回遊劇場 SPIRAL 会場巡り「まちなかに”渦”まくアート」
 10/12 回遊劇場 SPIRAL 会場巡り「多様性認め合う社会に」
 10/17 回遊劇場 SPIRAL 会場巡り「宝石箱のように美しく」
 10/25 回遊劇場 SPIRAL 会場巡り「大分映す色は？」
 11/1 回遊劇場 SPIRAL 会場巡り「場所に刺激受け実験」

朝日新聞 8/15 来月20日から「回遊劇場」
 8/15 町中が舞台 アート作品飾る

毎日新聞 8/6 回遊劇場 SPIRAL 来月開幕
 9/30 街中のアート作品楽しむ「回遊劇場 SPIRAL」開催中

長崎新聞 8/4 サンデーアート「芸術ウェーブ」

テレビ NHK 9/19 いろどり OITA

OBS 9/25 イブニングニュース

OAB 7/25 じもっと OITA
 9/23 じもっと OITA
 10/5 れじゃぐる
 11/2 JOKER DX

J:COM 10/3 ひるドッキリ!おおいた

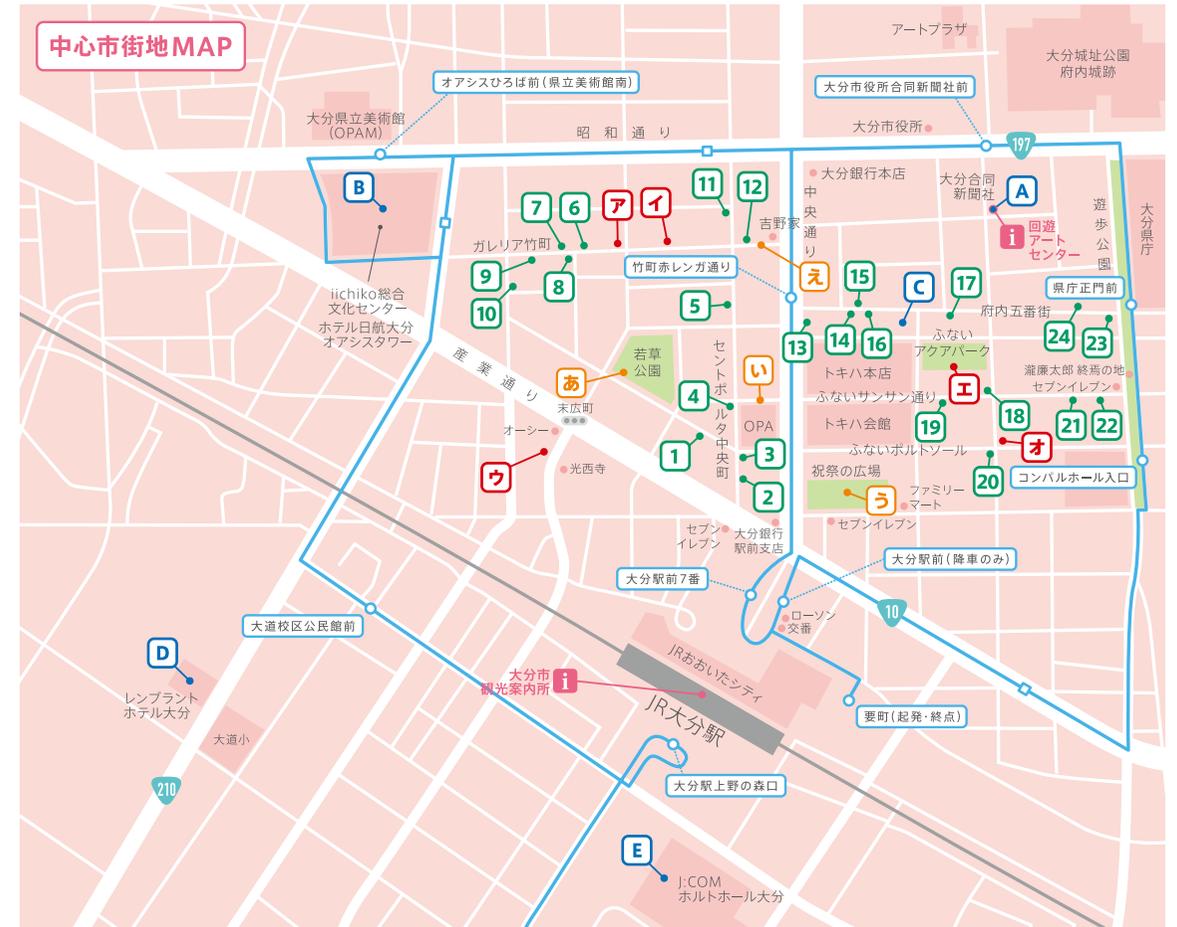
報道記録

ラジオ	OBS	5/28 BINGO	大分アートフェスティバル 2019「回遊劇場 SPIRAL」参加アーティスト募集
WEB	大分経済新聞	大分市のアートイベント「回遊劇場」も「秒読み」街中シンポで機運醸成へ	
	大分県観光情報公式サイト	OITA ART FESTIVAL 2019 回遊劇場 SPIRAL	
	大分なかよしプロジェクト	OITA ART FESTIVAL 2019 回遊劇場 SPIRAL	
	九州旅ネット	OITA ART FESTIVAL 2019 回遊劇場 SPIRAL	
	号外 NET 大分	【大分市】これから街中がアート作品でいっぱいになるかも?! 「回遊劇場 SPIRAL」	
	公募ガイド	大分アートフェスティバル 2019「回遊劇場 SPIRAL」参加アーティスト募集	
	じゃらん	OITA ART FESTIVAL 2019 回遊劇場 SPIRAL	
	マチバブ	「回遊劇場 SPIRAL」のボランティアを募集しています 大分市役所	
	祭の日	OITA ART FESTIVAL 回遊劇場 SPIRAL -2019年-	
	レンブラントホテル大分	OITA アートフェスティバル 2019 ~回遊劇場 SPIRAL~ 作品を展示しております	
	ART PLAZA	県内アート情報	
	FULL TIME FUN TIME OITA CITY	アーティストトーク	
	OITA Drip.	めぐって楽しい街中アートフェスティバル / 回遊劇場 SPIRAL	

SNS	いいやん!大分	7/25	アートの渦でおもてなし☆回遊劇場 SPIRAL
		9/5	シンポジウム&トークイベント参加者募集
		9/23	回遊劇場 SPIRAL が始まりました☆

雑誌	月刊シティ情報おいた	9月号
----	------------	-----

フリーペーパー	Discover Oita	大分芸術探訪 -ラグビーワールドカップと美術(上)- 大分芸術探訪 -ラグビーワールドカップと美術(下)-
---------	---------------	--



MAP	場所	作家《作品名》	「伝承駄美術 ダルマめぐり」展示場所	
インスタレーション			1	かみ風船 中央町店
A	大分合同新聞社旧輪転機室・旧紙庫	倉重光則・曾谷朝絵・原口典之	13	大分銀行赤レンガ館
B	ホテル日航大分 オアシスタワー	蛭川有紀	14	cafe giraffe カフェジラフ
C	なぎさやビル	眞壁陸二	15	エミコの野菜食堂
D	レンブラントホテル大分	岩澤有徑	16	大納言
E	J:COM ホルトホール大分	流 麻二果	17	若竹園府内5番街本店
ウォールアート			18	和inning なゝ瀬
ア	なかの座	かおなし まちす	19	手作り菓子の店 MIYABI
イ	たけまちマルシェ	大塚ひかり・永添楓恋 吉田兼由 (SignLab)	20	農園きやレモン直売所
ウ	小鹿公園	井川惺亮	21	お菓子の菊家 総本店
エ	ふないアクアパーク	大平由香理	22	ファンキィファラゴ
オ	Bスクエアビル	国本泰英	23	田崎洋酒店
			24	民芸の店 ぶんご

イベント		
あ	若草公園	現代美術二等兵 《伝承駄美術 ダルマめぐり》 ツアー集合場所
い	セントボルタ中央町 ダイソー横	西村正幸 《黒板家族 ~平和をつくる者~》 (ワークショップ)
う	祝祭の広場	国本泰英 眞壁陸二 かおなし まちす (アーティストトーク)
え	ガレリア竹町ドーム広場	岩澤有徑・大塚ひかり (シンポジウム)

OITA
ART
FESTIVAL
2019



回遊劇場 S P I R A L

日程：2019年9月20日(金) - 11月2日(土) 全44日間

会場：大分市中心市街地 各所

鑑賞者数：443,820名

主催：大分市アートを活かしたまちづくり推進会議

名誉会長：佐藤樹一郎 顧問：中山欽吾 会長：姫野昌治

委員：戸口勝司 八坂千景 幸重綱二 永松薫

アドバイザー：野田邦弘 監事：穴井壯志 吉田元

大分アートフェスティバル企画委員会

委員長：於保政昭 副委員長：尾野文俊 児玉憲明

委員：池邊泰治 大山直美 河野忍 佐野真紀子 佐々木英治

特別連携：大分県立芸術文化短期大学

後援：

大分合同新聞社 朝日新聞大分総局 読売新聞社 毎日新聞社 西日本新聞社 (社)共同通信社 時事通信社
大分支局 日刊工業新聞社 NHK 大分放送局 OBS 大分放送 TOS テレビ大分 OAB 大分朝日放送
エフエム大分 J:COM 大分ケーブルテレコム 月刊・シティ情報おいた 大分市商店街連合会

ディレクター：菅 章(大分市美術館館長)

事務局：大分市商工労働観光部商工労政課

デザイン：井下 悠(イノシタデザイン)

コピーライティング：嶋山哲史

インストーラー：大久保 剛(カナトリエ)

ボランティアスタッフ「ポールさん」:

諫山亜美 太田好美 大津奈央 奥村啓三 小野広子 川本侑奈 萱島亜由美 工藤福成

工藤和奏 後藤裕美 シャンク・ジェニファー・ニコル 田原みゆき 富澤史子 藤井海登

藤原京子 古畑 光 眞井智恵 牧野 葵

OITA ART FESTIVAL 2019
「回遊劇場 SPIRAL」記録集

執筆・監修：菅 章（「回遊劇場 SPIRAL」ディレクター / 大分市美術館館長）

編集：大分市アートを活かしたまちづくり推進会議事務局

デザイン：井下 悠（イノシタデザイン）

写真：久保貴史（ELEMENT）、大分市アートを活かしたまちづくり推進会議事務局、於保政昭

印刷：株式会社インタープリント

発行：大分市アートを活かしたまちづくり推進会議 ©2020